

思い出したこと

遠藤 まさくに

バブル華やかなりし頃、私が経営する零細企業は本社を荒川区に、支店を中央区に置いていた。当時の中央区はかつての名残で中小の印刷業者が犇めいていて、紙を扱う当社としてはそこに支店を置かざるを得なかったのだ。創業10年前後の後発の当社に当時の高価な土地の手当てなど出来る筈はなく、借り営業所兼倉庫であり、配送の車の駐車場は道路であった。間口3間程の狭い事務所に10人ほどの社員が、各々、営業兼配送の車を出はいるさせているから近所の大迷惑だったであろう。

ある日、これは、後で目撃者から聞いたのだが、十数台のパトカーから一斉に人が降りてきてわが社の車を駐車違反の現行犯として処理していった。

そして、本社にいる社長の私に呼び出しが来た。わが社の支店長は昔気質の「漢（おとこ）」である。責任を全部自分で被り最終的には自分が腹を切ればよいと、私にも報告しなかった。が、現実はそのはいかない。代表取締役社長の記述がなければ物事は始まらず、且つ、終わらない。

警察署で私は、担当の刑事（カナ？）から酷い罵詈雑言を浴びせられた。かの田中角栄首相でさえ、「思い出すと涙が出る」という過酷な取り調べである。

涙こそ出なかったが胸の中が煮えくり返っての帰途、ふと、彼にこの鬱憤を聞いてもらおうと、友人Sを思い出した。

これより半年くらい前か、Sと飲んでいる時に、彼曰く「今度私の高校の先輩が東南アジアの警察官の研修生受け入れの組織を作った。遠藤も、たまには世のため人のためになってみる」と言われて、なにがしかのお金を払ってその組織の会員になった。

Sは大学同期。同じクラス。ラグビー部の絵にかいたような右翼で、勤務先の上場企業でも接待交際費とは桁が違う機密費を自由にしていたようだった。右翼は仁義に厚い。左翼の私とも学生時代そのままの友人関係を続けていた。

電話で様子を聞いたSは、「そうか。お前はそんな時の為にあの会に入ったのだ」と一言言って電話を切った。

次に警察に出頭したときに驚いた。私が部屋に入るや否や出迎えた件の刑事（カナ？）が平身低頭、「イヤー、失礼しました。私は、言葉遣いが悪くて」と私をお客様扱い。

そして、二つ三つ事務的な質問を済ませると「有難うございました。どうぞ、お帰りください」と頭を下げ、忘れもしない、立ち上がってドアまで案内し、わざわざドアまで開けてくれる待遇となった。

そして、事件はそれで終わった。

その後、罰金の請求もなかった。始末書の要求もなかった。

半世紀も前の話であるが、もし、Sがいなかったら、私の人生は変わっていたかもしれない。

そして、この話に後日談がある。

大学の友人の奥さんが東村山市で市議員をしていた。トップ当選を何期も繰り返している議員であった。彼女は地元の某新興教団の不正を厳しく追求し続けた。そして、その教団の手により殺害された。

警察は、市議会同様、教団の勢力下であり、夫人の死は「自殺」として処理され、遺族たちの抗議の声は全く無視・圧殺された。

その抗議に加わって、教団の横暴を体験した私は再びSに電話をした。

私の電話を聞いたSは今度も一言「遠藤、この件は忘れろ」。

成程。つくづく、Sはプロなのだと思います。

以上